

# 遠やまびこ

石濱恒夫責任編集

大阪詩文会・文芸雑誌 5



Yoko Kamoi

遠やまびこ5号(第2巻5号) 昭和60年2月20日発行

定価五〇〇円

## エンヤラ ホイホイ風味を運ぶ山彦の恵菓。

商売繁昌シヤ  
笹モチテコイ…

耳をつんぎく陽気なお囃子の  
それこそ大阪の初景氣を  
象徴するかのよつな戎っさん。

そして紅白の縮緬で飾りたてた駕籠に

艶やかな衣裳の美妓をのせ、

ホエカゴ、ホイホイとばかりに

繰り込む宝恵籠は

浪速の新春を彩る十日戎の

華麗なメイン・イベントです。

エベッサン

アンジヨウタノンマッセ…

そんな今宮戎神社の祭礼にあやかった

味わいの古今伝授とでもいいたいような

〈戎っさん〉と宝恵加護。

古き良き大阪の味わいを今に

幸はふ味のことだまを

口許にホイホイと伝える

ふくよかな恵菓です。

宝恵加護

お子さまからお年寄りまで  
お菓子のロマンを伝える…

戎っさん



おしゃれなお菓子



大阪市浪速区戎本町2丁目6 TEL(06)633-7041(代)

# 遠やよび

石濱恒夫責任編集  
大阪詩文会・文芸雑誌 5

## 目次

児玉 環	初秋の伊香山 <small>いかにやま</small> ―北近江の四季 8
小寺 正三	《俳句》虫の音 8
保高みさ子	作家と女房 9
田中 克己	《詩》大阪の友 10
安岡章太郎	あのころ 11
宮本 又次	法華寺行 〈黄昏記より〉 12
扇 千恵	エセーニンの仔馬 14
桂 米朝	ルビの効用 15
岡本 好古	エライ―この不可解な奇語 17

高安 義郎	《詩》遠い夏の日 18
馬場 正雄	紅花地蔵 19
森 淳	ウーリー食堂 20
宮本 四郎	ファードの調べ 22
井畑 路	《川柳》法善寺 23
三田 純市	薄志弱行 23
大野 正雄	―あゝ懐かしの美人ホステス 25
中村 光行	浦島太郎のこと 28
清水 正一	《散文詩》JUSSO EAST ★わが町 29
磯田 敏夫	びっくりりぜんざい 30
寺田由紀夫	森進一の歌 32
赤尾 恵以	運命の不思議 34
矢倉喜八郎	小出檐重の一冊の手帳から 36
関 莊一郎	天寿の母 40



### 《まえがき》

やめようか、とも考えていた。貴重なめずらしい雑誌として、新聞の全国版でも紹介されたりして、広く知られたのはありがたく嬉しかったのだけれども、かえって要らぬ雑音も多くなって、わずらわしくもなったからだ。なにごとも、やはり形よりは、内容が大切なのである。

ええ恰好しい、の時代は次第に終りつつある。雑誌の原点へ戻って、創刊時の文芸春秋を手本と考えて、はじめたのであって、それぞれあまりにも独立専門化したかのふうな、文芸分野のあらゆる横のつながりをも思いやってもあった。だから各人が自由であって、ここでは他人に対しての批判もなく論争もない。バック・ナンバーを揃えたい、という図書館からの申し出も多くなった。三号など残部は一冊もない。どんなかたでも手を抜いた原稿書いてはらしまへんな―入院中に全冊を通読したという、桂米朝はんの言葉である。在東京の詩人田中克己さんの詩は、かつてのコギトの仲間、故中島榮次郎氏を偲ぶものである。もう一篇の戯れの童謡は、無断で掲載したけれども、誰れか作曲してくれないか、とのことでもあり、希望者があればこれもありがたく嬉しい。織田作さんの自筆俳句は、昭和十六年ごろだろうか、手帖に書いてくれたもので、高津中学校(旧制)時代に作ったのだといったが、その真偽

丸岡 忍

《俳句》蓼科の秋 42

喜尚 晃子

《掌の小説》けもの道 42

長井 勝正

蟬 44

亀井 巖夫

“作腐人”松つあん 46

井川 京子

月曜の朝の「さまあみろ」 47

綾部 純司

ほんの一曲の間・愛ゆえに 49

藤野 攻

鶏頭 52

藤本 啓

空襲 53

草野寅三郎

《短歌》台北の秋 55

林 京三

《日英開戦イギリス抑留手記》

— 慢島日誌鈔 —

55

田中 邦夫

邂逅 58

田摩 新

真つ白な歯よ 永遠にに 60

梶谷 晴男

ノースカロライナから 62

石川 忠

《俳句》南米のスイス5万籽 63

林 康史

山行き再考

— あるいは恐妻家の戯言

65

藤中 新平

アリス 66

居細工 豊

コンピュータに騙されるな！ 67

石濱純太郎

明治三十六年市岡中学生の日記 69

吉田彌寿夫

《詩》アルプス詩集—

「傾斜の情熱」より

70

西田長左衛門

《遺稿・小説》薄暮

大正元年モザイク十一月号

71

宮野 佐登

二十一世紀の課題 74

小出龍太郎

自由連想手帖より—「母へ」 75

ローレル二水会

《俳句》近詠 77

南部 松雄

餓鬼武者 78

村上 泰明

切嗟琢磨 81

香村 菊雄

長安の月が見たくて 83

は知らない。浪速高等学校（旧制）の名物教授、西田長左衛門先生の若き日の小説は、四号のは実は題名は、黒い蝶、であって、廻瀾となっていたのは、雅号なのである。手違いがあつて、誤りましたことを、ご遺族にもお詫びします。しかし、このように、この雑誌にはひそやかな、そして貴重な大阪の歴史もおのずから物語られているのだ。小出檜重さんの、新短歌雑誌雪、の表紙絵にしてもそうである。この五号でやめる、と宣言したところ、やめないでつづけなさい、と多くのひとたちから、叱られ励まされもした。田中克己さん編集の、堀辰雄創刊の雑誌、四季、も新年号から大阪で印刷その他をお引受けすることになった。いたずらに大阪を、文化不毛の地、などというな。こうしたささやかな積み重ねが、反省を生んで、いつかは花ひらくに違いない。難波利三くん、おめでとう。娘の絵本の出版記念会と偶然ぶつかってしまった、受賞パーティーには参加できなかったけれども、大阪にまたひとり直木賞作家が生ま

れた。こんど新世界か道頓堀か九條か今里で、お祝いのいっぱいをやりましょうよ。織田作之助賞の該当者ナシは当然だとも考えるが、異才磯田敏夫くんよ、筆を折るなぞと、もう二度といつてくれるな。織田作之助のためにもな。大阪新聞社社長で、みずから紙面に、おおさか名作の泉、を連載する永田照海くんや、文芸評論の大谷晃一さん、経済記者佐藤一段らとともに、大阪に近代文学館を作ろう、と声を高くしようと相談している。元老藤沢恒夫も賛成している。先刻、ひよいとわが家の文庫の古雑誌、昭和二十年三月一日発行といえは、まだ太平洋戦争下で、一月もたたぬうちに大阪は大空襲で焼野ヶ原と化したのであるが、その三月号の全国雪房刊、新文学の目次をひらいてみて、驚いた。大原富枝、石塚茂子、織田作之助、陳舜臣、青野季吉、中村光夫、宇野浩二……さらに片岡鐵兵を悼む言葉を川端康成、武田麟太郎、吉村正一郎が寄せている。学徒兵として関東軍の戦車隊にいたが、新文学は毎号兵舎へ送

相島 迪夫

長城に到って 85

田中 克己

《童謡》わたしの恋 87

飯田 棹水

宮本又次先生の歌 88

北尾 創

ある攻防 89

谷田 啓一

新世界回想 90

神坂 次郎

“読む”ということ 93

角山 栄

日本人の旅日記 94

石濱 恒夫

ビスタリ・ヒマール抄  
—タンボジエの寺院まで 96

■ 表紙・鴨居 羊子  
■ カット・小出 楠重  
■ 扉・織田作之助

られてきていたから、ひとしおの懐しさだが、発行所も南区西賑町十九番地から二十八番地の仮事務所へ移ったところらしい。この脈々たる大阪の文学魂——定価七十五銭、印刷編集人は神屋敷民蔵さんだが、現存するこの三月号は、あるいは極めて数少ないかもしれない。いずれ、陳くんの手許を得て、この雑誌に若き日の彼の訳業である印度現代詩抄も、転載させてもらおうと考えた。織田作の小説は、猿飛佐助、水遁巻である。なにしろ、ほぼ一年間、この雑誌を休憩してしまっただけども、身も心も疲れはててはいる。けれども、やらねばならぬことは、わたしでなければ出来ないであろうことは、まだまだ多いようである。おまえひとりの気負いだと笑ってくださいしても結構である。こんどは校正は塩田啓介さんが手伝ってください。今後は、あるいは年一回の発行になるかもしれないが、ひとつつづつ、石を積んでゆく。孤軍奮闘、やはりそれが一番かもしれない。

( 苦艸洞 )

三  
三  
一  
四  
九  
二  
五  
重  
重  
子  
子  
子  
子  
子

子  
子  
子

子  
子  
子  
子

子  
子  
子

子  
子  
子  
子  
子

た。まだ完全に女房的感覚の私は、こんな時もわが家での僻がでて、ついビールを男性諸氏についてしまふ。青野氏も馴れたもので、いつものようにコップが空くと、私の前にぐいと出される。特定の人のみでは悪いから、ついでに向う三軒のかた達にもつぐ。

そのうち妙な気配に気がついた。ま向いの平林女史が、そんな私をジロリと見られたのだ。あ、こんな事ではいけないのだな、と気づき、以後、気づかぬフリして青野氏の出されるコップを無視すると、青野さんは今度はとなりの平林女史の方につき出した。女史はツン、と顔をそ向けて知らんふり。見兼ねてやはり私がついだ。

その日の帰り、私はモーレッツな自己嫌悪におそわれた。私は自分の作品の中で、男性中心の世を批判し、男女の不平等を言いたてているくせに、実際にはどうだ、女房的感覚まるだしではいか、卑屈だぞ、なんたる醜態、と、冷然とそつぽを向いた作家平林さんの徹底ぶりの前に、冷汗のでる思いである。

数年して昭和二十六年に文学の本はわたしの勤め先の短大に入り  
哲学の本は名古屋大学に入った  
中島の墓はしかし建たないで  
谷九寺町真言宗の宗恵院の墓に入っている

教え子がしらせてくれた  
最後の講義は「堺事件」であつたとて  
感銘深かつたとのことである。

(詩人・成城大学名誉教授・詩誌「四季」  
編集人)

## あのころ

安岡 章太郎

そのころ、私は玉突き台のラシャ色のアメリカ古着の外套を着て、大森の町を歩いてゐた。するとガードの向う側から、そんな私をギョッとさせるやうな男がやって来る。緑色の上衣に、ミカン色のズボン、まるで書割りのクリスマス・ツリーが、そのまま歩き出したといふ恰好

身についた女房的感覚はその後もずっと私を拘束しつづけた。習性とは怖いものである。或いは私は他の女性たちより特に強く意識する人間だったのかも知れない。そんなことに少しも縛られず、己れ自身の生地のまま、天真らんまんにふるまう人もいる筈だ。

もつとも、夫の妻であることで、得している一面もあった筈だ。あの女はイヤな奴だけど、ホトケの徳さん(夫の仇名)の女房だから、まあ、我慢してやろう、と許された場合も多かろうと思う。逆に自縄自縛のことも。殊に作品を書く上で。夫の傘の下に生きるとは、むずかしいものである。

(作家)

## 大阪の友

田中 克己

天王寺商業から昭和五年

大阪高校の文乙に入り同級となつた

「かぎろひ」と「コギト」同人となり

だ。そのクリスマス男は俯向きかげんに坂を上つてくると、私を見て、  
「ああ、おれもケツタイな外套きた男、来よるな、と思てたところや」と言ふ。  
石濱と私とは、いつもそんなふうにして出会ひ、出会ふと大抵、日の暮れ方から十時近くまで、そのへんをほつき歩いた。喫茶店、ソバ屋、又、喫茶店。じめついた椅子の映画館、ドスぐろい風の吹く道路を歩いて大井の競馬も見に行つた。石濱は十円出して予想屋のシヨウウちゃんから、「5」6」と書いた紙切れを買つた。

「おれなら6」5だな」と私がデタラメに言ふと、

「ほな、6」5で行くか。ええな」と、石濱は急にせつぱ詰った声で言ひ、二人でたつた一枚の馬券を買つた。

けれども大体は何といふこともない毎日であつた。雨が降ると私は心細くなり、ガード下の露店の婆さんから、生卵を十個買つて下宿で一人で煮て食つた。石濱は海岸寄りの女ばかりのアパートの三畳の間で、おそろしく書きにくいシエー

昭和九年わたしが大阪の私立中学の教師となり

毎土曜には寺田町の姉さんの家で将棋をさし天井をご馳走になつた一番の親友だつたが

哲学とて詩以外は話できずカツラギという喫茶店での

『コギト』の会には出てくれた

桑原・五十嵐・野田の三先生も出席されわたしのハインネの話にはしかめつ面しておいでであつた

今度、姪御たちが全集を出し

野田博士が序文をかく

「伊丹の鬼貫考」も入るはずである

『日本浪漫派』の発起人で創刊号のトップの論文かき

あとは書かなかつた

わたしと同じく西洋ずきであつた

結婚・応召・戦死と皆あとで聞き

昭和二十二年三月十四日天理市機本の極楽寺での追悼会には

野田・肥下・伊東・坪井・服部とわたしが出席  
墓を建てるというので本の整理たのまれ

フアー万年筆で童話らしきものを書いてゐた。夜更けの一時過ぎ、勤めから帰つた女たちのひとしきり蛇口の水音や便所の扉をあけたてする音が静まつてからが、彼のかせぎ時であるらしかつた。そして、あくる日、昼過ぎに起き出すと、私たちはアテのない散歩の途上で、おたがひのギョツとする色彩の服装を認め合ひ、なんとなく水漬の流れるやうなダベリ合ひに時を過ごした。

喫茶店めぐりに倦きると、私たちは実用品も買つた。陰気なゴム合羽などを売つてゐる店で、石濱はゴム長を買ひ、私にも買へとすすめた。「東京の土は赤土の、泥んこやかさいな……」

言はれて買つてみると、なるほど大森の裏町を歩くのには、これほど具合の良いものはなかつた。足を濡らさずに歩けるといふことが奇蹟のやうに思へ、こいつをはいてヌカルミの夜道を歩くと足元は保護されて、親舟に乗つた心地であつた。

そんな或る日、私は、荒物屋でアンカを買はうとしてゐた石濱にそんなものよ

しく続いており、あらためてその壮  
さに感嘆した。

私はそばにいる中国人の案内役、張媒  
に問いかけた。

「大へんなものを持らえたものだが、始  
皇帝は、いったいどうして、こんなもの  
を造ったのですか。」張媒は答えた。

「貴男みたいな人が馬を駆って中国を攻  
めてきたので、入れないようにバリケー  
ドがわりに持らえたのです。」

彼のユーモアたっぷりの答えに、私の  
スタッフたちは手をたたき、足をならし  
て笑い合った。私の風貌が、かつて中国  
を席卷した蒙古人に似ているとからかわ  
れた訳だが、返す言葉がなく苦笑したも  
のである。

のちに考えてみると、義経とジンギ  
スカン、日蓮と蒙古大襲来などの物語  
を思い出し、先程感じた憧かしきは、そ  
れらに起因するかもしれない。などとと  
んでもない想像をしたものである。

万里の長城は中国人自身にとっても大  
きな誇りとなっている。男児が生まれる  
と、その親たちは長城に伴われていき、そ

様な人々の中で撮影をつづけていた私に  
とって、これは楽しい思い出になった。

万里の長城を西へ下り、雲崗の石仏を  
撮影して、目的を遂げた我々スタッフは  
再び北京へもどった。既に10日が過ぎて  
いた。

コミニティ国家独得のルールの中  
で、中国側スタッフとの価値感や習慣の  
異い、意志の疎通など、思ったより困難  
が多く我々ロケ隊は泥のように疲れきっ  
ていた。帰国前日は休日となり自由行動  
がとれた。しかし訪中前楽しみにしてい  
た故宮博物館や様々な歴史をたたえた名  
所旧跡を訪れる気力すら残っていなかつ  
た。

帰国を翌朝にひかえた夜、北京五星と  
かいりビールグラスを傾けながら、ブ  
ラックホールに落ち込んだ気分を味わつ  
た。今、私がいるのは30年前の日本では  
ないだろうか。タイムマシンで急激に時  
間を引きもどされて、終戦直後のヤミ市  
に無理矢理連れてこられたにちがいない。  
いやここは中国だ。日本文化のルー  
ツを有する中国。かつて栄華を誇り、詩

の偉大さをみせるといふ。そして心の広  
い立派な人になる様にと願いをかけるの  
である。

近代中国の父であり、名詩人としても  
名高い毛沢東前主席はこう詠んでいる。

『不到長城非好漢』（長城に到らざ  
んば好漢にあらず）

次のロケ地、雲崗の石仏は山西省大同  
市にあり、敦煌の石仏などと並び中国三  
大石窟の一つとされている。敦煌・蘭州  
からシルクロードを経てインドにつづ  
き、東西文化交流の重要な拠点であつた  
といわれる。

北京駅から夜行列車に乗り西へ8時  
間。大同駅に到着する。大同市はかつて  
日本軍が占拠したことのある炭鉱の町  
で、今なお石炭を運搬する荷馬車が行き  
交う。砂塵の中から3頭建ての馬車が、  
ぼんやりと浮びあがり、長い鞭を持った  
馱者が、身動きもせず置物の様に座つて  
いる様子はさながら古い絵画をみている  
思いである。

石窟の上の台地には廃墟となつた城郭  
が残っており、かつての栄華の跡が忍ば

を吟じ、酒を愛し、風流を好んだ中国で  
ある。しかし今、抑圧された共産主義国  
家の中で、彼らはどんな人生を歩もうと  
しているのだろうか。何かが地底で蠢め  
ているような不気味な音を感じなが  
ら、私は眠りにつくことができなかった。

帰国の朝、北京空港の出発ロビーには、  
我々と行動を共にした中国人スタッフが見  
送りにやつて来た。張、陳、金の三氏  
であつた。

彼らは日本のことわざ（もともとは中  
国のものらしい。）を器用に混ぜながら  
別れの言葉を述べ、「再現、再現」とく  
りかえしながら力を込めて私の手を握り  
しめた。

撮影中、お互いの立場を主張し合い、  
激しくぶつかりながら対決した相手であ  
る。しかし、この困難を乗り越え、お互  
いの仕事をやり遂げた中国スタッフに、  
急に友情を感じて胸が熱くなった。私は  
力を込めてその手を握りかえた。

さようなら中国の友よ。さようなら遠  
くて近い中国よ。 再現…… いつの  
日か。

## 大阪に 近代文学館を つくるろう

れる。ここでカメラを回していると泥ん  
こになった三人の子供たちが近寄つて来  
た。彼等の中の一人の男の子(小学校五・  
六年であろうか?)は少し日本語が話せ、  
さかんに日本のことを聞きたがつた。彼  
の祖父はかつて日本に居たことがあると  
いうことであつた。つきまといつて来るの  
で適当に相手をしてやると、嬉しそうに  
眼を輝かせた。別れる時、彼は感謝の意  
を込めて、小さな古めかしいバッジを私  
にくれた。それは中国鉄道員のバッジで  
あるとのことだつた。のちに中国人ス  
タッフにそれを見せると、バッジは本物  
であることが解つた。

これをつけていると、中国全土の鉄道  
がフリーパスであると聞き驚いた。うま  
く意志の通じない中国人スタッフや、遠  
まきにして、まるで珍しいものでもみる

その日北京では日本映画週間という催  
しがあり、今東光原作「お吟さま」が上  
映されていた。

(広告ディレクター)

## わたしの恋

田中克己

あまいあまい恋だつた  
サトウズズ子とその名である  
はす咲く堀にかこまれた  
大きな大きな家だつた

わたしはまだわすれない  
スズ子はおよめにいつちまい  
わたしのことなどもうわすれ  
坊やと嬢ちゃん産んだらな

3  
春夏秋冬いつだつて  
あの子のことはわすれられない  
リラ見て菊見て思つてる  
おさないおさない恋だつた

# お菓子のバラード

## 紅子の旅愁。

紅子の旅愁は

夜ごと繰り返りひろげられる

シエラザードの物語

飛んでいつてしまった

カーペットへのまなざしです

紅子の旅愁のひとつまは

たとえば月のない砂漠

アリババやシンドバッドたちと

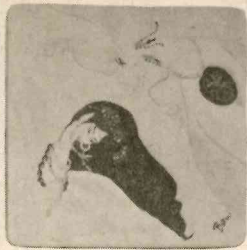
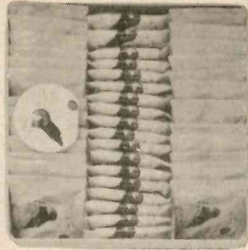
別れたあとのさびしきです

紅子の旅愁をやらわける

アラジンのランプのような魔法壇の

お湯で飲むココアと

甘い囁きみたいなお菓子…



### 紅子の旅愁

お菓子さまからお年寄りまで  
お菓子の口マンを伝える…



大阪市浪速区戎本町2丁目6  
TEL(06)633-7041(代)

雑誌「遠やまびこ」は有名書店なら  
びに、右の「山彦」各直営店にて販  
売しています。

チュウリップ通り虹のまち店 大阪(06)331-5505  
ナンバ店(ナンバ高島屋前) 大阪(06)331-5505  
中も店タイエー中も専門店街) 堺(073)911-2112  
とが店サンクルー梅専門店街) 堺(073)911-5503  
泉北光明池駅一番街店 大阪(06)331-5505  
伊藤萬ビル地下本町店 大阪(06)331-5505  
住吉大社店(ショップ南海住吉) 大阪(06)331-5505  
ナンバシティ店 大阪(06)331-5505  
大阪市庁内売店 大阪(06)331-5505  
近鉄名張駅前店 名張(057)331-5505  
姫路駅デパート店 姫路(079)331-5505  
三越大阪店・難波高島屋・近鉄上六店菓子売場

### 遠やまびこ 5号

発行日 昭和60年2月20日

編集人 石濱恒夫

発行人 山口恵久

印刷所 新明弘社

発行所 (株)山彦

大阪市浪速区戎本町

2丁目6

電話(06)六三三-七〇四二(代)

郵便番号 五五六

定価五〇〇円(限定一、〇〇〇部)

# 贈物は心の旅のおみやげです。

遠やまびこのひびきに

はや心かよわせる贈物の季節、

過客の月日をいかがお過ごしですか？

ゆきかう旅人のようなわたくしたちにとって、

贈物は心の旅のおみやげだといえるかもしれません。

そんなお気持ちにふさわしい山彦の恵菓のかずかず…

話題のお菓子のバラード《紅子の旅愁》をはじめ、

おつきあいをあんどしようする《宝恵加護》や《戒つさん》、

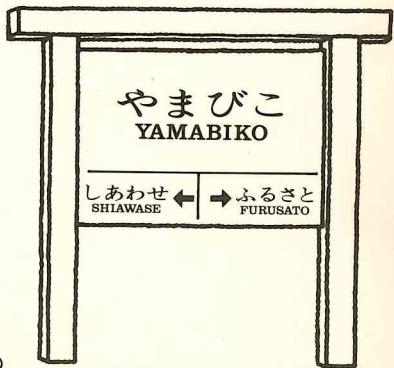
そしておなじみの《ジョリジョリ》や《エコーランド》シリーズ、

さらにデリシヤスフェアな《天神さん》など

心かよわせるおしゃれなお菓子が勢揃い。

さあ山彦の恵菓をおみやげに

心の旅へごいっしょに！



おしゃれなお菓子



大阪市浪速区戎本町2丁目6 TEL(06)633-7041(代)